

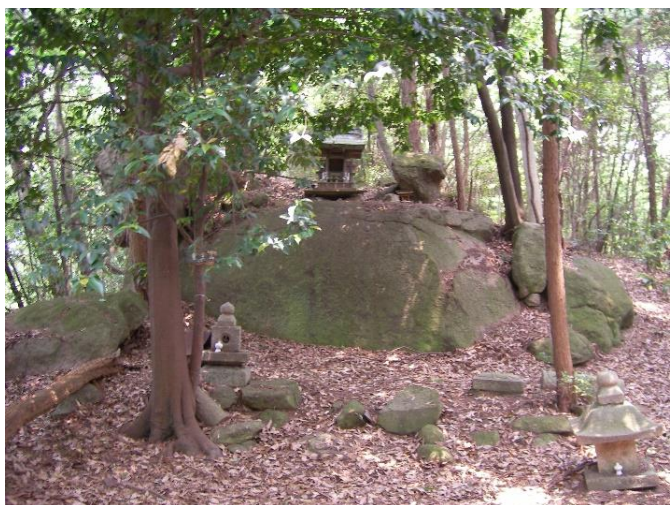
考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

**葛城北峯の宿考・木下蜜運著**

第十二は金剛寺獅子窟を去って北へ進むこと数丁傍示という在所の西に嬰兒山またの名を龍王山という山頂に達する。



山頂に龍王の祠があり早魃の折には村人達は慈雨をここに祈ったという。龍王山の東麓に今でも台地状の地形が残りここを小字金剛寺と称している。龍王山を含んだ祈雨の霊所、ここには行者の籠り所と考えられる石を組んだ石窟も存しており、北方の宿にいう金剛寺と考えて誤りなさそうである。



龍王石

淳和天皇の天長二年（825）干ばつでイネが枯れたこの苦しみが天上に達し、弘法大師に雨を祈らせたのが山頂の龍王石である。

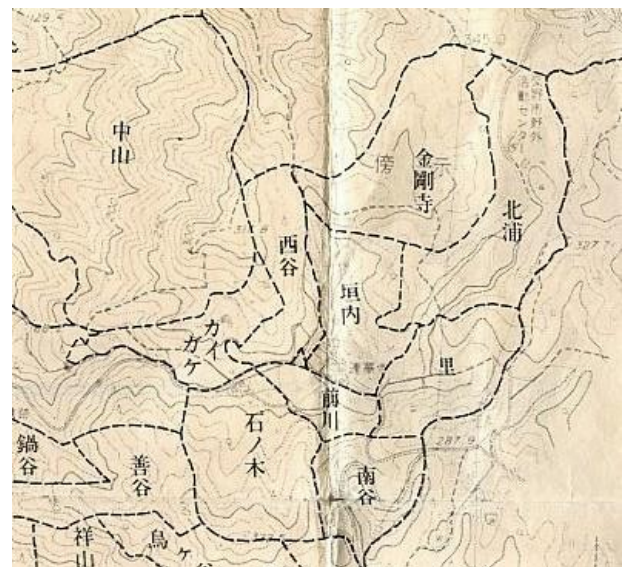


修行場の跡

あまりにも早く廃絶したためか、地名にかろうじてその名をとどめるばかりで創建にまつわる伝承やどのような歴史をたどったのか、もはや誰も語る人はいない。

ここまで「葛城北峯の宿考」の原文とおり

（写真・図挿入）



旧地名図



昔から傍示、伊丹家の家紋「下がり藤の中に加」となっているので加藤清正の子孫だと言い伝えられている。

## 傍示の地名由来

傍示とは、傍（ふだ）を立てて国境を示した。特に街道筋においては、この傾向が強い。

傍示は河内国と大和国の境になっている。

ここ傍示は交野から高山を経て富雄川を下り、三碓（みつがらす）で左折して奈良に通じる「かいがけ道」である。古代交野は天野川流域の条里制が施行されたごとく、豊かな地であり、かつ渡来人の活躍の場でもあった。寺、森辺りに古墳や遺跡が散在する。



当然この道は頻繁に利用されたことであろう。また、東大寺建立の際、大仏の銅の鑄型がうまく出来ないため、この仕事に熟達していた九州の宇佐八幡宮にいた渡来人の鑄型師を招くことになり、宇佐から大和に行くことになった。

一行は途中二班に分かれ、一班は枚方市の百済寺に、他の一班は交野市の獅子窟寺に宿泊した。そして、この「かいがけ道」を通り奈良の都に到着し、そして無事、大仏建立を助けたと言われている。



大仏道

平安時代以降は熊野参りの人がこの道を利用している。傍示にある八葉蓮華寺は熊野参りの道しるべとな

る。また、八王子社の一つである。昭和58年4月1日、市史編纂のため市内各寺院の仏像を調査中、氷室山八葉蓮華寺から国宝級の快慶作の阿弥陀如来立像（高さ82.4cmの半等身像で、来迎印を結び、わずかに左足を踏み出して衆生に向かって来迎する有様を表わしている）が発見された。

鎌倉時代初期、建久年間から建仁年間（1192～1203頃まで）に作られた作品で、快慶の造像活動の中でも自分の様式を確立するために模索していた時期と言われている。

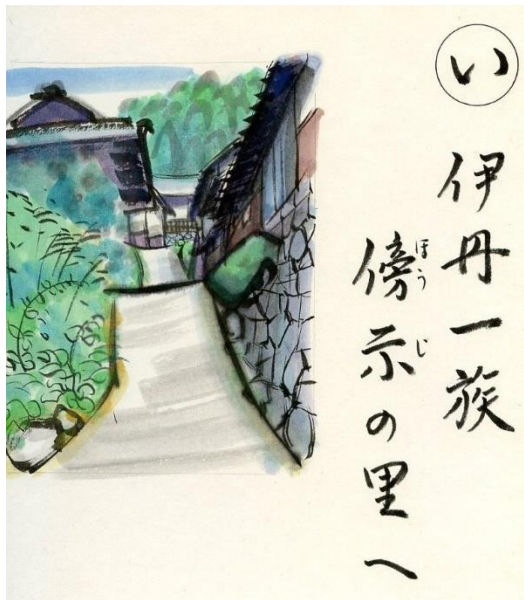
## 金箔鮮やか快慶の仏像



国宝級、交野(大阪)の山寺



このように、この道を往来する人々が多かったことから、国境に標柱を立て、旅人に示したのであった。現在の傍示に住んでおられる人の姓が、ほとんどが「伊丹氏」である。



淀川を渡って交野へ逃げた。しかし、織田方の追手の厳しさから逃れるため、交野の山中に入り、寺の背後の竜王山の後ろに移り住むことになった。

芥川城陥落の功により荒木村重は伊丹の城主になっている。また、大阪冬の陣の時、伊丹因幡守という人が大阪方の武将として出陣している。

天正年間に伊丹氏が生活を始め、その後もこの小さい谷を切り開いて、人口を増やすことなく、現在まで永々と生活をしてきているのである。



菅原神社



御神体



この伊丹氏が傍示に住みつくようになったのは天正元年（1573）のことである。

この年、かつて摂津国伊丹の城主であった伊丹兵庫親興が室町幕府の最後の将軍足利義昭に加勢して織田信長と戦を起こした。

しかし、戦況は思わしくなく、宇治の榎島が落とされたために親興は退去し、高槻の芥川城に逃げた。しかし、この城も織田方の荒木村重に落とされ、しかも、城主伊丹親興は討死してしまった。残った伊丹一族は



わがまち交野「地名」より

傍示・アルバム



寺住吉神社「かいはげの道」入口



水神さん



かいはげ道の石仏



天正地蔵とスマイル地蔵



北浦の辻



ジュンサイの採る池だった  
次号 6/28